

# 町家合宿 in 京都 vol.8

## ～食事についてその②～

山下桂永子

### ☆ある年の町家合宿観光の様子

某有名神社の門前通り。外国人観光客でごった返すお昼前の蒸し暑い日差しの中、町家合宿の一行は店先に並んだお土産物や食べ物の屋台を覗き、談笑しながら歩く。

Aさん（中学生女子）がお団子を買って食べてよいか聞いてきたので、私は「どうぞどうぞ」と答える。Aさんの持つ串団子のあまりの大きさに、一緒に歩いていたBさんCさん（同じく中学生女子）と団子を分けて食べるのかと思いきや、BさんとCさんは食べるAさんをカメラで撮っているが食べるわけではないよう。「BちゃんCちゃんは食べないの？」と聞くと、二人とも首を振る。それを見て、私は「Aちゃんそんな大きな団子を今食べてこの後の昼食、食べれるんやろうか、…」と少し心配になりながらも、大きな団子を気持ちよくもりもり食べながら、BさんCさんのカメラに向けて、インスタ栄えよろしくポーズを決めるAちゃんにつられ、自分も何か食べてみたくなってきた。

「団子って気分じゃないし、牛串焼きとかコロケってここじゃなくてもいいよなあ、…」など思いながら歩いていると、店の看板に「うずら」の文字。うずら卵？じゃない。ふと目線を落とすと、うずらの丸焼きがある。「わあ、親鳥のほうか、うずらって」と驚いた私が言うと、町家合宿スタッフの1人が「そういえば〇〇神社前はすずめが食べれるので有名」など教えてくれる。「うずら」の後ろには「すずめ」の文字も見える。うずらの丸焼きはすずめよりは大きくて、にわとりよりは小さめ。身体の部分は魚のように開いてあって、頭はそのまま丸ごと串焼きになっている。若干グロテスクに見えなくもないが、タレをかけて焼いているらしく、テカテカしていて美味しそう。お店の人が「骨ごと食べられますよ」と声をかけてくれる。「鳥の骨ごと？どういうこと？すずめも食べられるんですか？」と聞くと、すずめはお店の中でしか食べられないとのこと。



うずらの串焼き。

食べる私とスタッフと B さん C さん。右下の団子を食べ終わった串を持つ A さんの手にもご注目。

国産鳥 (小) うずら一串 700 円。思わず注文。つぼに入っているタレを塗ってもう一度焼きなおしてくれたものを透明パックに入れて渡される。うずらの頭からいく勇気は出ず、(たぶん) 肩のあたりをかぶりついてみると、うん香ばしい照り焼きの味。しっかりした肉質の鳥の中に、魚の小骨が多めに入っているような食感。確かに骨ごとバリバリいける。スタッフ同士で味見をしつつ、その様子をカメラで撮っていた B ちゃんと C ちゃんにも勧めるが、2 人は無言の笑顔でまた首を振る。スタッフの 1 人が私に向かって笑いながら「B ちゃん、昔うずら飼ってたんだって、そらかわいそうで食べられないよねえ」私「え！ほんと！？わあごめん！おいしいけどなんかごめん！」と慌てる私に B さんは「大丈夫」とニコニコ笑ってくれてはいたが、その心境まではわからない。

その後、串団子をたிரらげた A さんは、1 時間もしないうちに昼食 (バイキング) をしっかり食べ、夜ごはんのカレーはおかわりもして、かつ夜に神社のお祭に出かけた際には、屋台で売っていたチーズダッカルビなるボリュームのあるものをおいしそうにパクパクと食べ、寝る前には差し入れのアイスクリームも食べていた。

一方 B さんは、保護者の方から食べられないものを聞いてはいたが、自分で食べられないものをよけて食べれていたし、C さんも小食ではあるが、朝昼晩と食べないということにはなかった。他にも、町家の中では食事が取れるが、人の多いところでは食事ができない D さんなどもいた。

☆食べたり食べなかったりすることを選ぶ。

町家合宿では、基本的に一日三食（原則一食1人500円）ついているが、食べる子も食べない子もいる。観光の流れの中での食事になるので、時間も前後して、そのタイミングで食欲がない場合もあるので、基本的には参加者もスタッフも食べたかったら食べるし、食べなくなったら食べなくていいということにしている。

過去の町家合宿においては、普段は食事が取れなくてやせてしまい、通院しているという子もいたし、食べることに恐怖があって、下剤を持ち歩いている子もいた。そんな中で、私も最初は、参加者が食べるかどうかということを中心に心配して、おせっかいにも食事をすすめるようなこともしていたのだが、最近では「脱水症状なるからこれだけ飲んどいて」とスポーツ飲料を渡したり、お茶や塩分補給の飴を渡したりはするが、それも渡すだけで本当に飲んだか食べたかまでは詮索しないし、食べさせようと思うことはない。あまり食べないと体力が持たない心配もあるので、一応朝食で残ったごはんをおにぎりにして、お茶と一緒にクーラーバッグに詰めて観光に持っていき、食べたい時に食べてもらったりはしているが、それも強制ではない。

なぜか。町家合宿ではみんなそこそこ食べるからである。

不思議なことに、町家合宿では、普段は食事が取れていない子が、大学の学食で「おいしそうだから」と真夏に関わらず、ものすごくボリュームのある鍋焼きうどん定食を、ゆっくりとかみしめるようにたいらげていく姿を見ることがあったり、下剤を持ち歩いていた子が、量はそれほど食べないが、それなりに食卓では周りとお話をしながらカレーを食べ、その後下剤を飲んでトイレにこもるといってもなく、夜食に用意したおにぎりにも手を伸ばす、という姿を見る。強制してもいないのに、むしろ強制していない方が、食べてくれている。家や普段の食事と何が違うのだろうか。

エアコンのない猛暑の中、体力を使い果たすような強行軍の行程の中で、本能的に身体が食べようとしているのかもしれないが、そこには、やはり「選ぶ」ということと関係があるような気がしている。普段は食べていないけど、誰から強制されることもなく、「これを食べる」と自分で決めることができたから、食べることができたのではないだろうかと思っている。

しかもその「食べる」という選択は1人で決めているわけでも、誰かから強制されているわけでもない。周りの誰かに何かしら影響されたり、自分の影響も与えたりしながらの、集団の中での選択である。町家合宿のメインテーマである「選ぶ」という行為の中には、「拒

否してもいい」という選択肢も含まれている。食べてもいいし、食べなくてもいい。何を食べてもいいし、何を食べなくてもいい。何かしら自分の行動を選ぶということが、誰かの前で自然に表現され、そしてそれがどんな選択であっても、可能な限り受け止めるという仕組みがあって、そこで初めて自由に選択ができるのではないだろうか。



カレーは夕飯の定番メニューの1つ。

あるスタッフの方のお手製フナずしやぬか漬けも登場。チャレンジする子もしない子もいる。

#### ☆町家合宿で気付いた食べるということ

自分の食べたくないもの、嫌いなものはわかるけど、自分の食べたいものはわからない。そういうことは普段の生活で誰にでもあることだと思う。よくあることなのに、それは、自分に何が必要なのか、自分はどうしたいのかに気付くことが本当に難しいということに似ていて、そして同時に難しいのはそれを表現することだと思う。

町家合宿を始める前の私は、「ちゃんとした（健康的であったり、栄養バランスであったり）を考えた）ものを毎日朝昼晩しっかりと食べなきゃいけない」という思い込みにしばられていたような気がしている。食べたって、食べなかったっていい、親や友達に勧められたものを断ったっていい。本当に自分に必要なものを自分で選び、何かを拒否することは、相手を否定することとは違う。食べるって、選ぶって、もっと楽しく、もっと自由であっていいのだろうなということ、私自身が町家合宿の中で学んだことである。

☆拒否することやしないという選択があつていい。

話は変わるが、普段、仕事の中で関わる不登校の子を見ていると、明らかに学校に行くのがしんどそうなのに、「行かない」と言えない子が多いと感じる。「行かない」「行きたくない」と言えないのに、結果として学校には行っていない。明らかに行けない状態なのに「行かない」と選べないこと、そしてそれを伝えられないことで毎朝毎朝大変な葛藤でもがいているように思う。そして気がつけば半年、1年、数年と時間が過ぎ、親や先生が「もう無理しなくていいよ」と言うまで、それは続く。そこで誰かが選んでくれた「行かなくていい」という選択肢に待ってましたと飛びつくかと思いきや、あきらめずに「いや、自分は学校に行けるはずなんだ」とまだ不登校を頑張る子もいる。何かを拒否する、いやだと伝えることにひどく臆病であったり、そもそもそんな選択肢はないと思っているのかもしれない。

そんな選択肢のない状況にいる子どもが、町家合宿に来て、拒否をしてもいい、選んでいい、選択肢は無限にある、ということに触れ、その無限の選択肢の中で1つを手にとって楽しんでくれたらと願っている。



参加者の希望で、クリームソーダ専門店へ。これがインスタ映えというやつですか。